

平成21年度春季企画展「発掘調査速報展2009」展示品目録

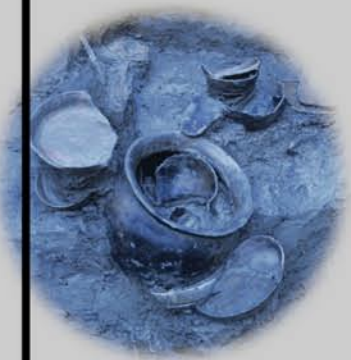
番号	品名	員数	遺跡名	所在地	時代
1	縄文土器 深鉢	1点	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	縄文時代
2	縄文土器 深鉢	1点	北条遺跡	北条一丁目	縄文時代
3	縄文土器 深鉢	1点	北条遺跡	北条一丁目	縄文時代
4	弥生土器 裝飾高杯	1点	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	弥生時代
5	弥生土器 高杯	3点	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	弥生時代
6	弥生土器 高杯	1点	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	弥生時代
7	弥生土器 甕	1点	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	弥生時代
8	須恵器	一括	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	古墳時代
9	斜格子叩き目のある土師器片	1点	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	古墳時代
10	土師器 平底鉢	2点	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	古墳時代
11	初期須恵器 把手付鉢	1点	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	古墳時代
12	初期須恵器 把手付碗	2点	船場川東区整遺跡第6地点	飯田	古墳時代
13	初期須恵器 杯	1点	小婦方遺跡	花田町加納原田	古墳時代
14	土師器 甕	1点	小婦方遺跡	花田町加納原田	古墳時代
15	土師器 長胴甕	1点	小婦方遺跡	花田町加納原田	古墳時代
16	土師器 平底鉢	1点	小婦方遺跡	花田町加納原田	古墳時代
17	土師器 甕	2点	小婦方遺跡	花田町加納原田	古墳時代
18	土師器 高杯	2点	小婦方遺跡	花田町加納原田	古墳時代
19	須恵器 甕	2点	小婦方遺跡	花田町加納原田	古墳時代
20	須恵器 蓋	1点	宮ノ浦遺跡	飾東町庄	奈良時代
21	須恵器 杯	6点	宮ノ浦遺跡	飾東町庄	奈良時代
22	土師器 杯	3点	宮ノ浦遺跡	飾東町庄	奈良時代
23	土師器 鉢	1点	宮ノ浦遺跡	飾東町庄	奈良時代
24	土師器 台付皿	1点	宮ノ浦遺跡	飾東町庄	奈良時代
25	土師器 高杯	1点	宮ノ浦遺跡	飾東町庄	奈良時代
26	土師器 鍋	1点	宮ノ浦遺跡	飾東町庄	奈良時代
27	土師器 甕	2点	宮ノ浦遺跡	飾東町庄	奈良時代
28	須恵器 杯	4点	豆腐町遺跡	南畝町一丁目・豆腐町・駅前町	奈良時代
29	須恵器 蓋	1点	豆腐町遺跡	南畝町一丁目・豆腐町・駅前町	奈良時代
30	土師器 杯	9点	豆腐町遺跡	南畝町一丁目・豆腐町・駅前町	奈良時代
31	土師器 皿	2点	豆腐町遺跡	南畝町一丁目・豆腐町・駅前町	奈良時代
32	土師器 鉢	1点	豆腐町遺跡	南畝町一丁目・豆腐町・駅前町	奈良時代
33	須恵器 壺	1点	豆腐町遺跡	南畝町一丁目・豆腐町・駅前町	奈良時代
34	製塩土器	1点	豆腐町遺跡	南畝町一丁目・豆腐町・駅前町	奈良時代
35	土師器 壺	1点	豆腐町遺跡	南畝町一丁目・豆腐町・駅前町	奈良時代
36	土師器 甕	4点	豆腐町遺跡	南畝町一丁目・豆腐町・駅前町	奈良時代
37	土師器 皿	7点	阿保下長・永河原遺跡	阿保甲	平安時代
38	須恵器 碗	1点	阿保下長・永河原遺跡	阿保甲	平安時代
39	青磁碗	1点	英賀保駅周辺遺跡第1地点	飾磨区山崎	平安～鎌倉時代
40	土師器 皿	3点	英賀保駅周辺遺跡第1地点	飾磨区山崎	平安～鎌倉時代
41	竊 羽口	1点	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代
42	伊万里焼 皿	1点	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代
43	青花 皿	1点	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代
44	唐津焼 皿	2点	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代
45	土師器 鍋	1点	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代
46	信楽焼 鉢	1点	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代
47	磁石	6点	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代
48	榎稗	1点	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代
49	竊 羽口	一括	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代
50	鉄滓	一括	姫路城城下町跡	呉服町	江戸時代

春季企画展

姫路市埋蔵文化財センター

発掘調査速報展

2009



ごあいさつ

播磨の中心として、古くから発展してきたここ姫路には、1200ヶ所をこえる遺跡が残されています。これらはまさに、先人が残した生きて証しといえるでしょう。

当センターでは、このような貴重な遺産を後世に継承するため、毎年数多くの発掘調査を行っており、平成20年度は2件の新発見の遺跡を含め、200件を超える膨大な数におよびました。

今回の企画展では、昨年度行った調査で明らかになった最新の成果を皆様にお知らせいたします。これを機会に、身近に残された先人の営みに思いをはせてみてはいかがでしょうか。

最後になりましたが、発掘調査および、本企画展の開催にご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

姫路市埋蔵文化財センター 館長

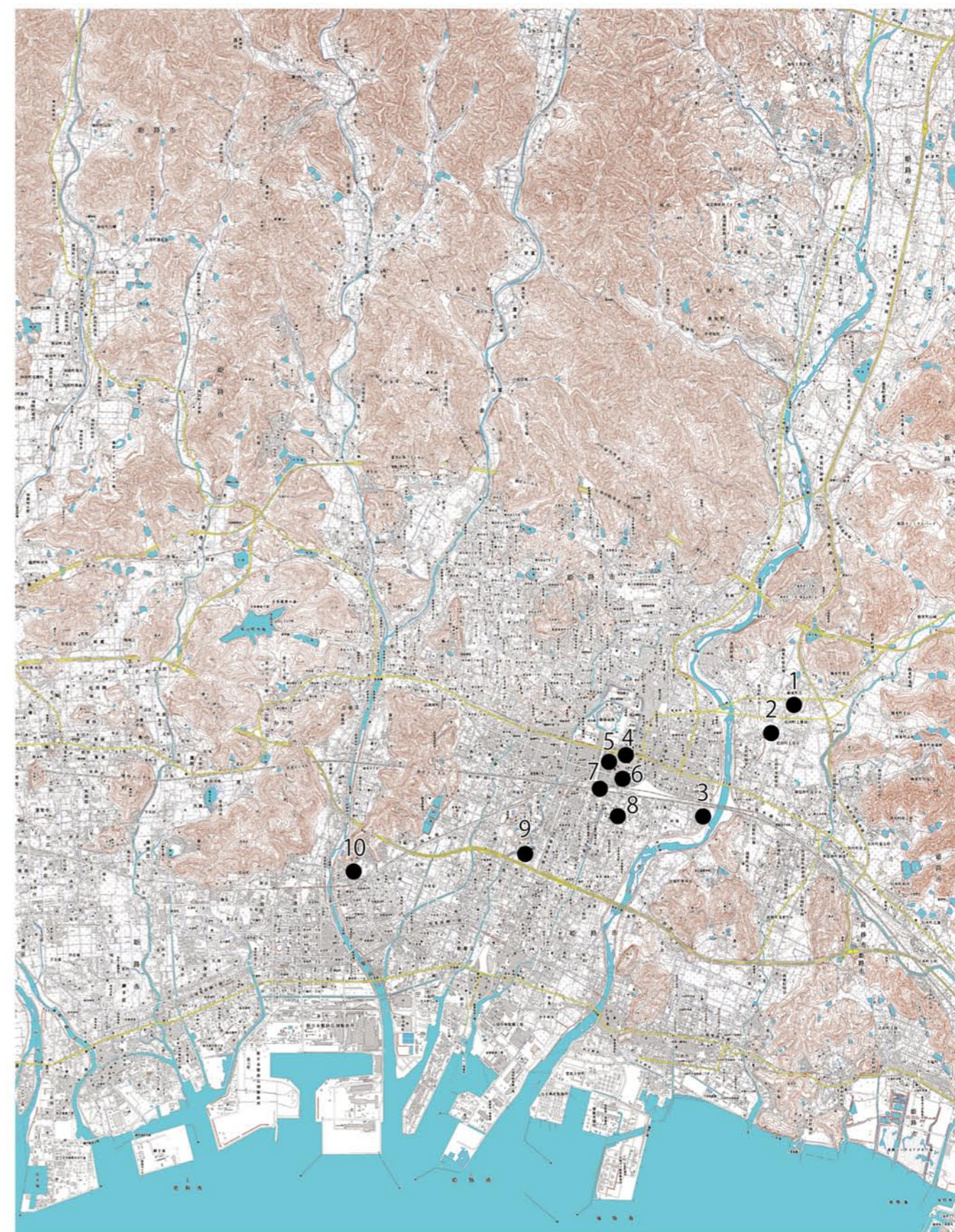
目次

展示関連遺跡位置図	2
船場川東区整遺跡第6地点	3
小婦方遺跡	5
豆腐町遺跡	7
阿保下長・永河原遺跡	9
北条遺跡	11
宮ノ浦遺跡	12
英賀保駅周辺遺跡第1地点	13

凡例

1. 本書は姫路市埋蔵文化財センターで平成21(2009)年4月29日(祝)から7月5日(日)まで開催する春季企画展「発掘調査速報展2009」の展示解説として作成したものである。
2. 本書巻末に出品目録を付し、出土遺跡名を明記した。出品目録番号は、会場での陳列番号と一致する。ただし、一部の展示品は、展示替えを行うため期間によっては展示されない場合がある。
3. 本書掲載の写真のうち、遺構・遺物写真については、当館センター専門職員が撮影した。ただし、漆紙文書の赤外線写真は中村 一郎氏による。
4. 本書及び、展示パネルに掲載した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図(網干・姫路南部・加古川・龍野・姫路北部・笠原・安志・前之庄・北条・山崎・寺前・粟賀町)を使用したものである。
5. 本企画は、当センター専門職員が行った。
6. 各遺跡の執筆は調査担当者が、編集は福井が行った。
7. 今回の企画展を開催するにあたり、次の機関・方々からご協力をいただきました。ここにご芳名を記して感謝の意を表します(敬称略・五十音順)

北村工務店 姫路市英賀保駅周辺土地区画整理事業組合 姫路市飯田手柄土地区画整理事業組合
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室 姫路市立城郭研究室 ヒラキ株式会社
浅野 啓介 工藤 茂博 国武 貞克 千葉 豊 中村 一郎 馬場 基 古尾谷 知浩
森川 実 山本 崇 渡辺 晃宏



- | | | |
|------------------|-----------------|--------------------|
| 1. 宮ノ浦遺跡 | 2. 小婦方遺跡 | 3. 阿保下長・永河原遺跡 |
| 4. 姫路城城下町跡(元塩町) | 5. 姫路城城下町跡(呉服町) | 6. 姫路城城下町跡(北条口一丁目) |
| 7. 豆腐町遺跡 | 8. 北条遺跡 | 9. 船場川東区整遺跡第6地点 |
| 10. 英賀保駅周辺遺跡第1地点 | | |

かつての船場川から様々な時代の土器が出土

せん ば がわひがしく せい い せき だいろくち てん いい だ
船場川東区整遺跡第6地点【飯田】



今回確認した古い船場川跡（東から）

飯田手柄地区の区画整理事業に伴う発掘調査は、今年で4年目を迎え、地区の東西の端と中央部分で調査を行いました。

このうち、東西両端の調査区では遺構が少なく、地形が調査区外へ低くなっていることから遺跡の端に当たると考えています。

一方、中央部分の調査区では、弥生時代から古墳時代に流れていた古い船場川の流路跡や、奈良時代や平安・鎌倉時代の掘立柱建物跡を確認しました。船場川の流路跡は東西方向に2条あり、それぞれから出土した土器の年代観から、北側の流路跡（流路跡1）は主に弥生時代後期前半、南側の流路跡（流路跡2）は主に古墳時代後期のものとわかりました。この流路跡2からは、縄文土器や初期須恵器といった珍しい遺物も出土しました。



古墳時代後期の須恵器（流路跡2）

流路跡2からは、古墳時代後期（約1500年前）の須恵器が大量に出土しました。ほとんど完全な形のものや復元可能なものが比較的多く、磨滅していないことからごく近くに当時の集落があったと考えています。



初期須恵器（流路跡2）

古墳時代後期の須恵器に混じって、初期須恵器が出土しました。初期須恵器とは、古墳時代中期（約1600年前）に朝鮮半島から持ち込まれた技術（轆轤使用、窖窯焼成）によるものです。もともとは把手が付いたティーカップやジョッキのような形をしていました。



縄文土器（流路跡2）

流路跡2の底からは、縄文土器が出土しました。この土器は、沈線で区画した部分に縄文を充填する文様が特徴で、縄文時代後期初頭（約4000年前）に位置づけることができます。今回展示している北条遺跡出土資料も含めて、市内南部では貴重な発見といえます。



加飾された高杯（流路跡1）

流路跡1からは、弥生時代後期前半（約2000年前）の土器がまとめて出土しました。写真の高杯は、文様が特に多いことがわかります。類似する土器は、有年原・田中遺跡（赤穂市）の円形周溝墓でもみられます。儀式用の特別な道具だったのででしょうか。

遠く朝鮮半島からここに。渡来人のムラ、新発見

こぶかたいせきはなだちようかのうほらだ
小婦方遺跡【花田町加納原田】



韓式系土器などが出土した土坑（北から）

小婦方遺跡は、姫路市街中心域の東側に所在する市川東岸の段丘上で見つかりました。現在は川との間に住宅が立ち並んでいますが、当時は市川の流が見える見晴らしの良い場所だったのでないかと想像できる立地です。

発掘調査は、造成予定地の周囲を取り囲む幅約1.5mの擁壁工事範囲で実施しました。ごく狭い面積の調査でしたが、そこから土坑1基と溝2条を確認しました。土坑は、直径1m余りの円形に近い形で、深さは60cm近くありました。溝はともに幅約50cm、深さが20cm程度で、一部が重なり合っていましたので、使用された時期が違うことがわかりました。これらの遺構には土器が大量に埋まっていたのですが、出土した土師器の甕や甑の形や特徴は、日本ではなく当時の朝鮮半島で使われていたものとよく似ていました。

このような土器を考古学では「韓式（韓式系）土器」と呼んでいます。右が出土した土器の写真ですが、甑こしきの底に穴がたくさんあいていたり、土器の表面を整える工具痕跡が、日本のものは平行線のハケ目であるのに対し、縄目や格子模様であるといった違いがあります。今回出土したものは地元の粘土で作られていたもので、朝鮮半島から土器が運ばれたのではなく、渡来した人々か子孫がここで生活していたことがわかりました。そして、日本での生産が始まった頃の須恵器、いわゆる初期須恵器が出土したことから、ムラが存在したのは5世紀半ば頃だったことも明らかとなりました。



出土した初期須恵器



出土した韓式系土器



溝（北から）

ところで、播磨は渡来人にまつわる遺跡や伝承が多く、市川東岸地域にも点在しています。なかでも、小婦方遺跡の南約2kmに所在する宮山古墳は、甲冑や金製耳飾りなど渡来系の副葬品が多く出土したことから、朝鮮半島と関係が深い人物の墓であるとされています。今回の調査では直接の繋がりを示す資料はみつきりませんでした。近接して渡来人と縁浅からぬ墓と集落がほぼ同時期に存在した事実は、当時の市川東岸地域を探る上で、とても興味深いことといえそうです。



遺跡の遠景（南から）

あぼしたおさ えいがわら いせき あぼこう
阿保下長・永河原遺跡【阿保甲】



平安時代後期の建物跡群 (北から)

阿保遺跡における区画整理に先立つ発掘調査は、今回で8年目を迎えました。

今回の調査では、弥生時代の川跡や古墳時代の住居の可能性のある落ち込み、平安時代後半から鎌倉時代にかけての掘立柱建物跡群など、多くの成果を得ることができました。

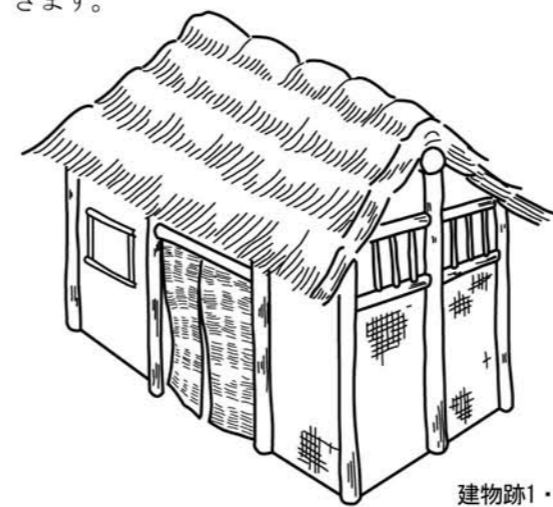
その中でも、掘立柱建物群は現在の市川のすぐ西側の調査区で検出しました。この付近で過去に行った調査でも同時期の建物跡を確認しており、一帯に集落が広がっていたことがわかりました。

建物跡の柱穴内からは土器の細片しか出土しなかったため、詳細な時期についてはよくわかりませんが、建物跡の周囲にある土坑から出土した土器の年代観から、この集落が平安時代後期（12世紀後半）に営まれていたと考えています。



建物群の配置 (上が北)

今回確認した7棟の掘立柱建物跡は、全てが同時に併存していたのではなく、2、3段階の時期差をもっていたことがわかりました。また、建物同士の軸線の通りが比較的良好、その方向が当時の飾磨郡条里 (N23° E) に平行していることから、村の建設が計画的になされていたと考えています。このような条里の名残は、現在でも古い田畑や道路の向きとして観察することができます。



建物跡1・2想定図



土坑6遺物出土状況 (西から)

この土坑は、建物跡1と2の間で確認しました。平面は楕円形で、長軸は約2m、短軸約1m、深さ約20cmです。大振りの河原石とともに多数の土師皿と須恵器碗が出土しました。埋土は暗い灰色で炭粒や灰を多く含むのが特徴です。この埋土が建物跡の柱穴のものと非常に似通っている点や類似する土師皿の小片が出土した点から、埋没時期が建物の廃絶とほぼ同時期であると判断しました。



土坑6出土遺物

土坑6からは、1から9のタイプの土師器皿が多く出土しました。口径約9cm、高さ約1cmとほぼ同じ大きさをしています。その底をみると轆轤ろくろを使用して成形し、最後にヘラで切り取った痕跡がそのまま残っています。加えて、10のような京都の土器と類似しているものもごく少数ながらみられます。11は須恵器碗です。

ほうじょう い せき ほう じょう いっ ちょう め
北条遺跡【北条一丁目】



磨消縄文を施した深鉢片

北条遺跡は姫路駅の南東約700mに位置し、主に弥生時代から古墳時代の集落跡として知られています。

工場建設に伴って遺跡の状況を確認するために調査を行ったところ、地下約1.5mから、縄文時代後期前半(約4000年前)の土器が出土しました。

上の写真の土器には、縄文地の部分と無地の部分を曲線で区切った磨消縄文という装飾がみられます。土器の形や模様の付け方から、同じ磨消縄文を施した船場川東区整遺跡第6地点出土の土器よりやや新しいものと思われる。また、右の写真の土器は、2方向の縄文を組み合わせた羽状縄文で飾られています。これは磨消縄文の後の時期にみられる特徴です。

これまでのところ、姫路市の中心部では縄文時代の遺跡は知られていません。今回の発掘調査によって土器がまとまって出土したことで、市街地にも縄文時代の集落跡などが眠っている可能性が出てきました。



羽状縄文を施した深鉢片

みや の うら い せき しき とう ちよう しょう
宮ノ浦遺跡【飾東町庄】

宮ノ浦遺跡は、今年度新しく発見された遺跡の一つです。調査を開始したところ、調査区の中央をほぼ東西方向に横切る溝を検出しました。



堀の可能性のある溝(東から)

幅は約2.7m、深さ約1.1mで、断面が逆台形をしているしっかりとした溝です。

この溝からは、須恵器や土師器など多くの遺物が出土しました。



溝から出土した土器

出土した土器の中でよく目につくのは、赤褐色の土師器です。これは、内面に放射状の暗文が施されている珍しい資料です。この一群は、これまでの研究によると、奈良時代前半(約1300年前)のもので、主に役人の仕器であったと考えられています。

また、調査区内の別の地点では、規模の大きな柱穴が並んでいる状況を確認しました。



方形掘りかたをもつ掘立柱建物跡(西から)

この柱穴は、一辺が約80cmの方形の掘りかたをもち、深さは約50~70cmです。調査区が狭いため、建物全体の規模は不明ですが、大型の部類に入ることは間違いありません。この建物跡から北側へ約5mの所でも同じ方向を向く建物跡(2×1間以上)を検出しました。建物跡周辺では瓦は出土しませんでした。別にまとまって出土する遺構があり、遺跡内に瓦葺きの建物が建っていたことも判りました。

以上のように、宮ノ浦遺跡が、当時の公的な施設であったことは明らかですが、具体的な性格については慎重な検討が必要です。いずれにせよ、上原田遺跡とともにただならぬ遺跡であることは間違いありません。

あがほえきしゅうへん いせきだいいちち てん
英賀保駅周辺遺跡第1地点【飾磨区山崎】



遺跡から夢前川を望む（東から）

手前が遺跡で、中程が現在の山崎の集落です。その奥には夢前川が流れています。



調査区全景（北から）

遺跡の西端の調査区です。掘立柱建物跡、墓、溝、土坑などが見つかりました。



屋敷墓（北から）

長軸98cm、短軸73cmの土坑墓です。副葬品として龍泉窯系青磁碗1点と土師器皿3点が出土しました。



副葬品（土師器皿と青磁碗）

これまでに6基の中世墓が見つっていますが、そのうちの5基に中国製の磁器が副葬されていました。

ひめじじょうじょうかまちあと
姫路城城下町跡【呉服町、元塩町、北条口一丁目】

堀と町屋の調査を行いました。元塩町では中堀の南面石垣と町屋の遺構がほぼ絵図どおりの位置で見つかりました。北条口一丁目では、北条口門へ至る土橋と外堀が見つっていますが、絵図で想定される位置に石垣は見当たらないことから、絵図よりも実際の外堀の幅が広いことが明らかになりました。いずれの調査でも安全上の理由から堀内の掘削は一部に留めていますが、埋土からは江戸時代から明治・大正時代までの様々な遺物が出土しています。

呉服町の調査地は大量の鞆の羽口や鉄滓、砥石の出土から城下にあった鍛冶屋の内の一軒と考えられます。出土遺物から江戸時代を通じて鍛冶屋であったことがわかり、姫路城城下町跡の実態を知る上で重要な成果であるといえます。



町の鍛冶屋（呉服町）

左側の石列が敷地と小溝筋とを区画する土塀基礎です。内側の土坑内に羽口や鉄滓が廃棄されていました。



中堀の南側の石垣（元塩町）

手前の石組が姫路城中堀の南面石垣です。内堀の石垣と比較すると小振りな石材を使用しています。



外堀（北条口一丁目）

調査区全面が外堀です。このことから外堀の幅は16m以上であることがわかりました。